

第2回 横浜国際園芸博覧会具体化検討会 発言概要

開催日時：令和2年12月21日（月）10:00～12:00

場 所：三田共用会議所 第4特別会議室

- 計画のコンセプトについて、箱庭的なイベントで終了させるのではなく、山下公園や三溪園などの周辺区域と連携することが必要と考える。開催地は横浜の市街化調整区域であるが、この地で開催する横浜市にとっての意義、またその波及効果を考え、博覧会実施後に何を獲得するのか戦略的に組み立てていく必要があるのではないかと。
- 会場へのアクセスについて、コロナの影響でモビリティ利用も変化したが、来場者交通の需要予測が必要と考える。新規交通システムの検討を先行して行うとよいのではないかと。将来的に交通システムをレガシーとして利用するのであれば、途中駅の設定や、接続も考える必要がある。将来的なプランも見通しながら計画を練ることが必要。
- 南町田からの来場者が多いと考えており、国が音頭を取ってやらないといけないが、瀬谷駅だけでなく南町田の駅との連携が重要であり、都市的エネルギーが感じられるものがあるべきだし、それを演出することが必要。
- 前回、大阪・関西万博が最後の博覧会ではないかという委員の意見があったが、今回の資料をみると、花と緑とグリーンインフラに関する記述を除くと、大阪・関西万博と酷似しているように見えるのが気になっている。また、横文字、カタカナが多すぎる印象。大阪花博の基本理念と基本方針には横文字・カタカナの記述はひとつもない。
- 参加者が重要であると記載があり、その通りであるが、AIPHの規則をみると、花・緑の園芸・造園の出展参加者に対して、補償措置あるいは賞金のどちらかを提供するのが特色になっている。大阪花博の時と異なり経済状況も非常に厳しい。園芸博では元々出展関係の費用を事業予算上十分に配分しておくことが重要であるが、横浜でやるのであれば、出展関係の事業費として、出展勸奨関係の事務局費用や出展参加を行う生産者や造園会社などの支援のための援助金をかなり大きな金額で用意するような事業構造にしないと園芸博が成り立たないのではないかと。特に、生産者は家業で日々の生産にも従事しており、無償では参加が困難であろう。
- 会場計画と公園整備については実現性の観点から危惧している。再度、万国博覧会と国際園芸博覧会の事業構造をよく確認する必要がある。もし、1500万人が来場する園芸博を開催するのであれば、75～100haの公園を100%完成させるつもりがなければ実現は難しい。仮設が半分以上ある計画では実現不可能である。愛・地球博は時間が無くなったため、面的なインフラがある青少年公園でやらざるを得なかった。園芸博覧会では公園の整備が特に重要である。それが無い大阪・関西万博は建設費が膨らんでいる。建設費用が高騰しているのも要因の1つだが、インフラが入っていないのが大きな要因である。園芸博では公園をどこまで整備できるかが重要である。

- 来場者目標について、規模的には感覚として 1000 万人くらいではないかと考えた。1500 万人の来場者を見込むのであれば、パーク・アンド・ライド・システムを導入する必要があると思うが、100 億円単位で資金が必要になるのではないか。駐車場を借り上げる必要があるため、かなりの費用が積み上がると考える。
- 公園整備、来場者目標、会場整備を合わせた事業構造について、資料では愛知万博や大阪・関西万博だけでなく、淡路花博や浜名湖花博、その他園芸博覧会を参考に検討、と書かれているが、これは逆で、万博を参考にするのではなく、AIPH と BIE が重なる花の万博の園芸博の部分に加えて、淡路花博や浜名湖花博を参考に園芸博としての先催の事業構造例をよく確認して、国が開催するレベルにするという事業構造の検討が必要。園芸博覧会をベースに考えなければならない。
- 結論として、来場者 1500 万人を目標とするのであれば、園芸博にふさわしい、国が補助をするに足る公園を 100ha くらい準備しないと、実現は難しい。また、農水・国交省もどのくらい予算を出すことができるのか、算定しておくべき。BIE の登録、閣議了解を多少遅らせてもちゃんと検討しないと園芸博の成功は難しい。
- コンクールの質を上げれば上げるほど、また来場したい方が増えれば増えるほど、園芸博の成果に関わってくるため、ブランド化する、質を上げることが重要。AIPH に提案しながらやっていくのが良い。世界各国への発信にもつながり、ブランド化されたコンクールになる。
- 大阪・関西万博（2025 年）の開催を踏まえて、関係性やストーリーを汲んでいるということが重要。「いのち輝く未来社会のデザイン」という共有し得るコンセプトの中でやっているのだから、そこを深掘りしてやっていくと、良い BIE へのプレゼンとなるのではないか。
- 全体を通じてグリーンインフラ等の「実装」がキーワードとなる。グリーンの切り口から、いかにして実装するか、実装するとどうなるかを見せることを、関西万博を受け継いで緑の観点から提案するのがこの園芸博覧会ではないか。最初から人に住んでもらうといった、画期的な案があったが、これを実現するためには法的な整備も含めると事前準備が必要となるため、早期に具体的な実装プランを提示していただきたい。
- 機運の醸成という部分では、コロナ禍で Face to Face のコミュニケーションの実施が難しい中で、どう乗り越えるのか、何かアイデアを出していただきたい。
- 園芸博が従来と変わって見えるために有効なアプローチは、作法が違えて見えるようにしなければならない。作風が変わって見えることが求められる
- この場所が将来、横浜市あるいは国にとって、どのような意義・コンセプトを表した場所であるのか、構成を考えていくことが大切である。日本の農業や日本の地域が壊滅的であるという状況を踏まえ、さらに都市の均質化・集中化が進む中で、この場所がどのような役割を持つべきなのかを考えなければならない。
- 将来的に人が住む場所や、農業を営むコミュニティなどを想定した目標が今から設定

されなければ、イベントをやっているだけだろうと思われてしまうように思う。

- ビレッジという呼称を使っているが、本当に将来につながるようなビレッジを作っていただきたい。そのためには保健所、学校、公民館、集会所等のコミュニティのインフラが含まれている計画でないといけない。そのような観点は予算には入っていないが、次年度以降、どのように行っていくかということが書かれていないといけない。
- 地方自治体の公共施設は予算制約が厳しく、ほとんどの公共施設は身動きできなくなっている状況の中で、地域との関わり方について十分考慮すべき。企業以外に、NPOや農業のための移住を考えている個人など縦横斜めの、地域の構成要員に対して声をかけていかないと、結局計画後にうまくいかないのではないかと、そこが重要。
- 世界に向けて声をかける上では見識が必要となる。例えば、世界銀行が投資したスリランカ東部と日本の香川県は乾燥地のため池という部分に共通点がある。スリランカに立ち寄り灌漑設備を学んだ中国の僧の書物から灌漑設備を学んだ空海が溜池を満濃池に持ってくるなど、グローバルな歴史的な流れを計画に入れなければいけない。経済的なグローバルではなく、歴史的なグローバルをちゃんと考えないといけない。
- この地域の元々の農業や灌漑など、少しでも歴史的な背景が伝わるような積み上げを今からはじめていかないと、この場所としての歴史性がなくなる。
- 前述の活動を含めて、来年からの取組を示すこと。その取組自体が広報になる。マスコミによる広報よりも、口コミで伝わっていく作風が重要であることを申しあげておきたい。
- また、資料にはエンターテインメントとアートが並立して書かれているが、アートはコミュニケーションの手立てであり、エンターテインメントとアートは違う。
- レガシーという言葉にかなり違和感がある。レガシーというと、あくまで博覧会があって、その後に何を残すのかという発想。主が博覧会でその後がレガシーという考え方だと思うが、この博覧会は、後が先にあるもの。市街化調整地域、周囲に市街化地域が広がる上瀬谷が、将来の横浜あるいは日本にとってどういった意義をもつ街として提示されるのかということが先にあって、そのイメージの前段階として、博覧会を考えるとこの方がいい姿ではないかと考える。リバースレガシーとってよいのかもしれないが、そのような発想が必要ではないか。
- 博覧会開催後の街について、何をキーに考えればよいか。いうまでもなくグリーンが発想の原点ではあるが、但し、緑だ、園芸だ、農地だ、だけにとどまらないものを目指したい。
- コロナ禍の影響で、急速に社会に浸透した ICT、在宅勤務などを織り込んだ街を考えていく必要がある。これまでの社会は、人が様々な労働力、情報を持っており、情報を持っている人が動いて、ある場所で労働力、情報を提供していたが、これからの社会は、人が移動せずに労働力や情報を発揮するといった社会になるのではないかと。ある地域に様々な情報や労働力を持った人がとどまって、ヘテロな状態でその地域がそうした

人々で構成されるような社会ができることが想定される。

- これまでの社会は、用途地域がそうであるとおりに、個々の土地は純化していった、純化された土地がモザイク状に構成されることによって、都市全体として必要な機能や役割が満たされるという形でつくられてきたことに対して、将来は、個々の状態がヘテロな状態になっていくことを前提としてどのような街をつくっていくのか、そういう問いかけになっていく。その街の姿を博覧会の前倒しのものとしてどう考えていくのかが必要。
- グリーンインフラとは、素材としての緑や植物、緑地、農地からできているインフラではなく、グリーンという思想や発想から作られたインフラのことをいうと考えている。素材としてはグレー（コンクリートやアスファルト）でも構わない。設計図をつくり、完成形をつくり、竣工後にメンテナンスをしてなるべく劣化を防ぎながら維持するといったことがグレーからの発想とするならば、グリーンからの発想とは、常に状況に応じて作り変え、修正するようなことをし続けていくという発想。よって完成形もなければ、メンテナンスという概念もないということになる。端的な例は盆栽。広く言えば農業、里山といったものが挙げられる。
- 上記に示した発想でグレーも含めて、街、インフラをどう作るかがグリーンインフラの究極の姿であり、それと ICT を前提とした新しい暮らしをどうデザインするかをベースに博覧会の後の街をどのようにデザインするかを詰め、リバーズレガシーとして博覧会を考えるとという手順が必要。
- 村という発想は、農・地域等のコンセプトを感じさせやすい重要な言葉だと考える。懐古的に里山に行くのではなく、未来の里山という概念を提示できれば良い。
- ゾーニングについて、1500万人という規模の来場者で、村を感じさせることは難しいと感じる。ICTで体験を共有する手段は色々あるので、それらを活用して会場に来る人間を絞ることも検討の余地があるのではないか。
- パーク・アンド・ライド・システムについて、環境をテーマにした博覧会に車で来場させ、また莫大な資金をかけることはコンセプトとして違和感がある。
- 体験を共有するという点では、アートはコミュニケーションの一種であり、コミュニケーションテクノロジーとしてのアートについて、様々な手法を試しているアーティストたちの世界を巻き込むべき。ただの広報やただの体験では伝わらない時代であり、全面的にアートの手法を使うのが重要ではないか。
- 会場計画について、動線で中央に大きな道が引かれているが、この構図では村を感じることは難しい。大型バスなど、従来の交通手段を前提として作られているように見える。
- 会場の全体の姿がどうやったら村に見えるかは道の問題と、地形の問題も大きいと思う。里山独特の微地形が今の会場計画にはそれほど感じられない。微地形は水系とも一体となっているのでその辺りも考慮してほしい。
- 人を住まわせるというのは話題としてかなり面白い。未来の里山の生活が既に開始さ

れていて、それが進化しながら博覧会になっていく、といった時間軸があると今までの博覧会と違った印象になるのではないか。

- 生物を扱う点で、大阪・関西万博と園芸博は異なっていると考える。前回検討会では“農”の心というコンセプトについて議論が及んだが、農業分野においても農業の在り方についての捉え方が変容している。これまでは生産性重視であったが、現在は持続的な生態系サービスと調和させることが重要視されており、農業だけでなく社会の在り方にも目が向けられている。今回の園芸博でも SDGs などの持続的な在り方に関する視点は欠かせない。
- 過去の国際園芸博がこれまで起こしてきたイベント後の経済効果は非常に大きいと考えている。大阪花博開催後、バブルがはじけ他の農産物が生産額を落とす中、花きだけは例外的に花博開催後 8 年程度生産額は上昇した。大阪花博の大規模な展示「花の谷」や、浜名湖花博の百華園という四季折々の花の展示など、四季を持つ日本ならではの展示があり、花きのアピールに大きな効果があったのではないか。今回の園芸博覧会でも、博覧会後の経済効果が得られるようなものを目指してほしい。
- 経済効果だけでなく、花と緑にはストレス緩和の効果など様々な機能があり、社会にとってもこの博覧会は資するものと思う。農業や花・緑の機能に関する多面的な観点をもって、取り組んでいっていただきたい。
- 前回、大阪花博と本博覧会は全く異なるものであるべきだと述べた。これまで、フォアキャストの観点で世界は進行してきたが、現在は生態系サービス、自然のリソースの限界からバックキャストして考えていかなければならないと考えている。EU が各国の基金から、コロナを前提とした新たな時代に向けた取組であるグリーンリカバリーに向けて動いている。パンデミックが社会を変容させるという時代認識であり、新たな時代の想定が必要であると認識しているように思われる。地球は **Garden** そのものであり、**Garden** の原義、“囲まれた楽園”を実感し・その価値に体感的に目覚めるという原体験を得ることがこの博覧会で重要なコンセプトであると考えている。このコンセプトは、関西万博とは全く異なる、バックキャストの発想から得られるものである。「人は自然の全体なり。故に自然を知らざる則は吾が身神の生死を知らず、生死を知らざる則は自然の人に非ず。人に非ずして、生きて何をか為さんや」という安藤昌益の言葉にある通りの状況に我々はまさに置かれており、この体感を得ることが本博覧会のコンセプトではないか。
- この計画の中では、体感というコンセプトが十分に表現されていないのではないか。GAFA の本社が植物公園のようなデザインを行っているが、DX が進むほど、リアルな体験へのアプローチが重要になっていくのではないかと考える。Covid-19 の影響下で大規模な行動変容が起こっており、改めてリアルな体験へのアプローチの重要性に目が向けられるのではないか。自然からの学びについて、昨今改めて注目が集まっている。ワクチンや山形の鶴岡で慶應大学のベンチャーが蜘蛛の糸の製造に成功した例など、

近年ではバイオミミックの概念も浸透してきている。本博覧会でも、改めて自然から学ぶことは多くある、生態系サービスを大事にしていこう、ということポジティブに発信していくのがよいのではないか。

- ビレッジというコンセプトについて、地域文化をそのまま再現した国交省の国営公園などにも学ぶべき点が見えるかと考える。様々な形で、バックキャストの発想で生態系サービスの重要性、楽しさを訴えていかなければならず、またその楽しさが“幸せ”につながるのではないか。
- 大阪・関西万博と言葉が共通しすぎているように思う。また、具体性が不足している。“ビレッジ”や“共創”など、具体的には何を指しており、どのように実現するのか。この地域の特性が、最大のインフラであるので、今後の利活用の観点にも言及いただきたい。
- 圃場に関する言及をすべき。近隣の優良農地と可能であれば組合をおこし、施設園芸を公的に補助しながら整備をし、保全圃場としていくことも可能性としては考えられるのではないか。
- 来場者を1500万人とした考え方についても、それが事業収支の視点で考えるのか、会場にその位来ていただいて啓発することを目的とするのか、その基準についてもしっかりと示していくべき。
- 欧州の国際園芸博覧会は、近年の傾向として、都市環境に焦点が当たっているとされるが、それは戦後の園芸博覧会が始まった頃からすでに行っており、目新しいことではない。実は華々しい園芸博覧会の表の世界の裏側には欧米の植物資源戦略がある。アジアでも、中国では、1999年の昆明園芸博覧会以後、漢方に利用する植物をみだりに国外に出さなくなった。中国では、国の政策として、植物の収集保存関連の費用や労力を国として増やしている。例えば、日本では柑橘類について世界一の遺伝資源を持っているが、それを将来保全できるのかという危惧がある。しきれていないという実態がある。皇居東御苑では、現在の上皇陛下が天皇陛下の時代の思し召しにより、柑橘系の古品種が集められ、自ら御手植えもされているが、来園者の観賞のためだけでなく、古来人が関わった遺伝資源を大切にすべきというメッセージではないか。横浜の園芸博覧会で、そのような資源の観点でも来場者に訴求していただきたい。
- 江戸の下町は非常に人口密度の高い地域にも関わらず、世界に冠たる園芸文化を生み出し、世界の品種改良においても極めて貴重なリソースとなってきたという実績がある。世界への発信に横浜が寄与したというバックグラウンドも含めて、アピールしていくとよいのではないか。
- 生命の根源である植物が存在するという価値の大きさ、そんな文明観でものを考えていかなければいけない時代が来たという共感を、農の心として、表現できる園芸博覧会にしてほしい。

以上